

示説 4

多重課題において模擬患者を下級生が演じる妥当性と意義

キーワード：模擬患者、フィードバック、多重課題、看護の統合と実践

○久保田美雪、中村圭子、柄澤清美、菅原真優美
新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

I. 目的

P大学では、大学卒業前の4年生に多重課題演習を実施している。多重課題演習は、下級生(3年生)が模擬患者となり、4年生が実際の看護業務を行う演習である。本研究の目的は、多重課題において患者役を学生が演じることの妥当性と意義について検討することである。

II. 方法

1. 対象:P大学看護学科3年生で患者役を体験した13人。
2. 期間:2011年3月9日~10日。
3. 方法:A.患者役①教員が設定した患者情報に合わせて、患者を演じる。②演習終了後、看護師役に対して感じたこと等をフィードバックする。
B.質問紙調査:「患者役を演じること」「看護師役にフィードバックすること」等を問う質問紙を独自に作成し、多重課題演習終了時に回答してもらった。その後、記述統計で集計し、自由回答は類似する内容をカテゴリー化して分析した。
4. 倫理的配慮:対象者には事前に調査の趣旨、回答は無記名で自由意思であること、研究への不参加が不利益にならないこと、調査結果は研究目的以外に使用しないことを口頭と文書で説明し、質問紙の回収をもって同意とみなした。

III. 結果

1. 回答者:対象者13人のうち、回答が得られたのは13人(有効回答100%)であった。
2. 患者役を演じること:「フィードバックする内容を意識しつつ演じる」「シナリオに沿って発言する」「問いかけにアドリブで対応する」「どの看護師役にも同じように演じる」は、10人(76.9%)の学生が演じることができたと答えた。「不安を非言語的に表現する」「身体的苦痛を非言語的に表現する」は、8人(61.5%)の学生が演じることができなかったと答えており、さらに11人(84.6%)が戸惑いを感じていた。
3. 看護師役へのフィードバック:「看護師役のマナー」「看護技術の安全性・安楽性」「看護師役に対するポジティブな感情」は、11人(84.6%)の学生がフィードバックできたと答えた。「看護師役に対するネガティブな感情」「適切な内容のフィードバック」は、7人(53.8%)の学生がフィードバックをするに戸惑いを感じていた。
4. 患者役としての行動:看護師役に対して「援助しやすい

ように協力した」「看護師役が困りそうなことは言わなかった」学生は、9人(69.2%)であった。

5. 企画:「多重課題の目的」「フィードバックポイント」について、13人(100%)が理解して参加していた。

6. 演習に参加した動機や感想:患者役を引き受けた動機は、「興味・関心」6人(46.2%)、「自分の勉強」5人(38.5%)であった。患者役を通して「優先順位」「患者に不安を与える言動」「患者対応」等を学んでいた。

IV. 考察

患者役を演じる時、学生は不安や身体的苦痛を非言語的に表わすことに難しさを感じていた。具体的に患者として演じてほしい表現を指導する必要がある。看護師役が上級生のため、ネガティブなフィードバックに戸惑いを感じたり、演じる中で「看護師に協力したり、困ることを言わない」など下級生として遠慮をしていた。これは、学生患者役の限界だと思われる。しかし、今回、基本的に「シナリオに沿って演じる」「看護師役に対するフィードバック」はできた。その理由は各領域の臨地実習を終えた3年生が患者役になったことで、患者の立場や心理、また看護師の役割に対する理解が容易であったためと考える。

患者役を経験した学生は、看護師役に対する観察とフィードバックを通して、「患者の気持ち」「患者対応」「優先順位」などに気づいており、演習参加が自身の学習機会にもなっていたことがわかった。

V. 結論

多重課題演習において下級生が患者役を演じた結果、「シナリオに沿って演じる」「看護師役に対するフィードバック」については達成されたため、その効果は妥当である。さらに、患者役を通しての学習効果も認められたものの、いくつかの限界も示唆された。

参考文献

- 1) 清水裕子.患者教育への模擬患者活用.看護展望.2009; 8: 69-73.
- 2) 森山美知子,宮下美香,山本純子他.シミュレーション学習による技術教育の強化 臨床判断と一連の動作を学習する方略.看護教育.2006; 47(9): 804-809.